

「恋ふ」と「乞ふ」

大野 晋

「恋ふ」という動詞は万葉集を読む上では非常に重要な動詞である。これを何と現代語に訳すかということとは、「岩波古語辞典」を作ったときに、いろいろ考えたことであつた。結局

あるひとりの異性に気持も身も引かれる意と書いた。これは類義語に「したふ」「思ふ」「好く」「好む」などがあるので、それらとの差を明確に示そうとしていろいろ考えた結果の到達点であつた。こうした場合、「恋ふ」一つを対象として考えるのでは正しい理解に達することは、なかなかできないものである。

その時「恋ふ」の語源は何かを考えてみたが、「恋ふ」のコは、コ甲類で、オ列甲類の音が重要な基本語の語根に現れることは稀なので、それが疑問の一つであつた。

「恋ふ」の語源として大槻文彦や折口信夫は「乞ふ」をあてている。相手の魂を乞うのが「恋ふ」であるという考えである。

しかしこの語源説は簡単に否定される。何故なら「恋ふ」のコはコ甲類であり、「乞ふ」のコはコ乙類である。コ甲類乙類の別は、平安初期五十年くらいまでは、明らかに保たれていたものであるから、奈良時代には明確に区別されていた。それを混同して考察することはできない。

またこの二つの動詞は、活用の形式も、上二段活用と四段活用とで相違しているから、「恋ひ」のヒはヒ乙類、「乞ひ」のヒはヒ甲類と推定することができ（また実例もあり）、これも発音が相違している。従つて、「恋ひ」

と「乞ひ」とを同一視することは明白に誤りである。

ここまでは、橋本進吉先生の上代特殊仮名遣を考えに入れれば直ちに答えの出ることである。しかし、その先は、語源的なことは皆目何も分からないで終わっていた。ところが、最近「タミル語大辞典」に *kuppu* という動詞を見た。その意味として

1 To join hands as in worship.

2 To heap up, as sand or grain.

3 To close, contract, shut in, as an umbrella;
to withdraw, draw in, as the sun his rays.

〔一、礼拝において、手を合わせる。〕

二、砂や穀物を盛りあげる。〕

三、傘などを閉じる。太陽が引っこむ。〕

があげてある。一の意味は古い例があるので、サムガダス夫人にこれを確かめた。

するとサムガダス夫人の説明は、*kuṭṭu* という動詞は、「何かお願いがあるとき、神に向かって手を合わせることである」という。文例としては、六世紀の *Arputa-tiruvantati* 85: 1 に次の一節がある。

〔神を〕眼を見開いて見て、私の手をびったりと
合わせよう。(*kuppium*) …… 私が仕合わせになる

ように。〕

また八世紀の *Tiruppalliyerucei* 4: 5 に次の一節がある。

「礼拝のために頭の上でしっかりと手を合わせて、一列に並んでいる人々」

ここでも *kuppinar* という言葉が使われている。タミル語の *k* は、日本語の *k* に対応する例がたくさんある。〔一は日本語の *o* に対応する。また *pp* は日本語の *f* に対応する例が数々ある。すると

タミル語 *kuppu*: 日本語 *kōfu*

という対応は音的に全く問題がない。意味上も日本語の「乞ふ」の用例を見ると「天地の神を乞ひつつ」(万葉三六八二)とあり、また享和本新撰字鏡には

裨 强依反 誓祈也 禱百霊也 祈也

知加不 又己布 又伊乃留

とある。これらと一致すると見てよいと思う。

してみると「乞ふ」は由来の非常に古い単語であると考えられる。

しかし、「恋ふ」については不明である。外間守善氏によると「恋ふ」にあたる沖縄語は無いそうである。ここに何か問題があるように思われる。ことによると「恋ふ」の *o* は、何かの合成音で、新しい形なかもしれない。